

範馬勇次郎が行く、SCP 財団の機密施設見学会

テキーラ11

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地上最強の生物は愉悦を求める為、SCP財団の施設をを見学するようです。

目次

1th	Tale 「鬼と幼女」	1
2nd	Tale 「ダルマさんが転んだ と1つ目のスライム」	11
3rd	Tale 「泣いた恥ずかしが り屋と笑う鬼」	18
Side	Tale 「始まらない英雄 譚」	25
4th	Tale 「老人虐待」	32
5th	Tale 「赤い大鳥の丸焼き」	37

1 t h T a l e 「鬼と幼女」

SCP財団とは、SCPと呼ばれる、超常的な『現象』『物体』『存在』『場所』を『確保』『収容』『保護』を目的として、存在している秘密結社である。

そんなSCP財団は、政府よりSCPの管理を任されており、それらを収容しておく為のサイトやエリアと呼ばれる機密施設を多数持っている。

そんな機密施設の1つが、SCP財団発足以来の未曾有の危機に陥っていた。

複数のSCPによる大規模な収容違反が起きていたのである。

なんとか鎮圧しようとして動いていた職員や部隊は全滅し、機密施設内は地獄と化していた。

所変わって、日本某県に存在する米軍基地内、応接室にて。

そこには2人の男がおり、片方は緊張した面持ちで立っており、1人はリラックスした様に革張りのソファアに腰掛けていた。

立っているのは、一目で歴戦の軍人だと分かる風貌の男、名をストライダムという。

座っているのは、武力というものを体現し、一目で地上最強だと分らせる風貌の男、

その名は範馬勇次郎。

「おいおい、ストライダム……シケた面しやがって、まさか下らねえ話の為に、この俺をこんな場所に連れてきたわけじゃねえだろうな。」

からかうように、ストライダムにそう語りかける地上最強の生物こと勇次郎。

「……オーガ……私は、君にこの話をするべきか……正直、迷っていたのだが……」

ストライダムはそう前置きし、真剣な顔をしながら切り出す。

「……オーガよ……SCP、または、SCP財団というのは知っているかね……？」

「ああ？……戦場の傭兵共を誘ってる連中が、そんな名を言っていた様な気がするが、詳しくは知らねえな。」

勇次郎は聞きなれない言葉に、記憶を巡らせそう答える。

「だろうな……SCP及びSCP財団というのは……そう、分かりやすく言えば、超常現象や超常の存在の通称、そして、それを管理している組織だと思ってくれればいい。」

勇次郎の答えに、どう説明すれば良いか迷いながらも語るストライダム。

「……なに？……ついに、頭がイカれちゃったのか？ストライダムよ。」

ストライダムの突拍子も無い説明に、笑いながらそんな事を聞く勇次郎。

「…………だから、話したく無かったのだ…………。いいか、オーガよ。この組織は実在するのだ…………。それも政府公認の組織としてな。」

ヤレヤレといった様子で、しかし真剣な表情で話すストライダム。

「ほう…………。で？そのオカルト組織が、なんだってんだ？」

ストライダムとの付き合いが長い勇次郎は、嘘は言っていないと悟り、続きを促す。

「実は、そこで大規模な収容違反……………。つまり、SCPの大量脱走が起きたのだ。

そこで……………」

「ストライダム…………。まさか、この俺にそのオカルト組織の尻拭いをしろと？」

ストライダムが言い終わる前に、青筋を立てた勇次郎が静かな怒りを宿しながらストライダムに圧力をかける。

「ま、待ってくれ！もちろん、無理強いななどしないし、出来ん…………。だが、私も詳しくは把握してないが…………。SCPはその殆どが凶悪極まりない戦闘力を誇っているそうだ…………。どうだろうか、君にとっては楽しい場所だと思うが…………。もしかしたら、戦場以上にね。」

慌てて勇次郎を宥めながら、説明を続けるストライダム。

「なるほど…………。どうせ、トラムプ辺りからの要請だろう？…………。伝えておけ、もし俺が満足出来なきゃ…………。アメリカ軍を喰らいに行くとな。」

ストライダムという言葉聞き、見透かした様にそう話す勇次郎。

「わ、わかった。そうならない様に、私は祈るとしよう……さて、早速飛ぶかね？」

「ああ、SCPとやら、堪能させてもらおうとしよう。」

勇次郎がそう締めくくり、2人は輸送機のC-17、通称グロブIIIに乗り込む。

しばらく空の旅を楽しめば、問題の財団施設上空に近付く。

「じゃあ、施設見学と洒落こんで来るぜ。」

「ああ、楽しんで来るといい。」

勇次郎とストライダムはそう言葉を組み交わせれば、勇次郎は飛び立った。

「キャプテン……本当に良かったのですか？」

付き添いの隊員がストライダムにそう問いかける。

「もちろんだ。オーガは、如何なる軍の爆撃なんかよりよっぽど強力なのだよ。化け物

どもは思い知る事になるだろう……地上最強とはどういう事をな。」

高度3000mからのスカイダイビング中の勇次郎。

目標は森林地帯にある放射能汚染があるとされる地域。

無論、これは財団側のカヴァーストリーであり、機密施設がある場所だ。

鬱蒼と生い茂るジャングルの上空を落下していく勇次郎の背中には、パラシュートが

存在していない。

パラシュート無し、3000mからの自由落下。通常、この状態での地面への激突は死を免れない。

しかし、ほんの数例ではあるが、奇跡的に助かった者はいる。例を1つあげるなら、ヴェスナ・ヴィロヴィツチ氏の生還劇だろう。

1972年、JATユーゴスラビア航空機が上空1万mにて爆破される事件が起きた。

その航空機に搭乗していた客室乗務員、当時22歳のヴェスナは1万m上空に投げ出され地面に激突。

しかし、落下場所が森林地帯であり湿地という事もあり、それらがクッションとなり奇跡的に生還した。

さて、ごく普通の女性が助かったのと似た条件に、高さはその3分の1以下。

そして、落下していくのは地上最強の生物である勇次郎。

この条件を元に範馬勇次郎という地上最強の生物は死ぬだろうか？怪我を負うだろうか？

答えは、否である。

勇次郎は、木々をクッションにしながら、地面に見事着地するのであった。

「……が、財団の施設とやらか。」

勇次郎の10m先には、大規模な収容施設と思しき建物があった。

巨大なゲートは重々しく閉じられており、何人も寄せ付けられないという頑強さがある。

「お邪魔。」

勇次郎はゲートの僅かな隙間に、まるでゼリーにでも指を突っ込むかのように隙間を捻じ開ける。

そして、十分に手が入った所で、その桁違いな腕力で持つて無理矢理こじ開け中に入る。

幾重にも施されたロックをもともせず、中へ入って行く勇次郎。

「おいおい、こりゃあ……!!?」

さしもの勇次郎も、中の光景には驚くしか無かった。

中には職員や鎮圧部隊と思われる死体の数々があつたが、そんなものに驚く勇次郎では無い。

では、勇次郎を驚かせたものとはなんだったのか？

それは、財団の実験によって引き起こされたワームホール現象にあつた。

分かりやすく言ってしまうえば、広大な施設が、幾つもバラバラに繋がっていたのだ。

「なるほど……SCPとやら、存外に楽しめそうだ。」

そんな状況でも、愉しそうに笑う勇次郎。

しばらく進むと、この血なまぐさい場所に似つかわしくない、推定3、4歳の少女が立っていた。

少女は怯えた様子で震えながら泣いていた。

場所こそ似つかわしくないが、反応そのものは少女のそれであり、故に不自然さはそれ程無いようにも思える。

しかし、その少女こそ勇次郎が初じめて目にするSCPであった。

アイテム番号：SCP-053、オブジェクトクラス：Euclid、通称少女。

この少女は見た目、性格、反応、どれを取っても一見すればただの少女だが、その能力は凶悪極まりない。

この少女と10分以上視線を合わせると、または物理的接触をしようと

激しい被害妄想に取り憑かれ、周りの人間を敵と誤認し殺害しようとしてしまうのだ。

そして、最後にはこの少女にも手をかけ、その後心臓発作を起こし死んでしまう。

なお、少女は攻撃されても瞬時に傷が塞がり、ほぼ不死と言える。

「おい、そのガキ。迷子にでもなったか？」

勇次郎はそんな事を知る由もなく少女に近付き、頭の上に手を置いてしまう。

すると、途端に勇次郎の胸中に激しい被害妄想が湧き上がってくる。

だ。

赤子の頃に出来て、今は出来ないという道理、勇次郎には存在しない。

故に、言葉を介する事無くそれを伝えた。

(この俺に、命令するかツツツ!!!! 貴様ツツツ!!!!)

それは、どんな叫び声よりも大きく、どんな脅しよりも恐ろしかった。

勇次郎のそのオーラに、言葉より雄弁な命令に、その何かは従わざるを得なかった。

と、同時に、幼女は恐ろしさから泣き声をあげようとする。

「泣くな。」

勇次郎のたった一言の命令。

それは、幼女の本能が、拒否を許さなかった。

故に幼女は泣き声をあげることなく我慢した。

「ふん、泣かなかったのは褒めてやる。褒美をやるう、こっちに来い。」

幼女は勇次郎におずおずと近付くと、勇次郎は幼女の頭をくしゃくしゃと撫で、肩車をしてやる。

「わあー、たかーい！ありがとー！」

幼女は、初めて体験する肩車に楽しそうに笑い、はしゃぎ、感謝を述べる。

「ふつ、誇れ、この範馬勇次郎に肩車をして貰ってるんだ。」

勇次郎は幼女の感謝に、満更でもなさそうな笑みを浮かべて進む。

「ハハ、いえー」

勇次郎に肩車をされながら進んでいた幼女は、自身の収容室を見つけ指差した。

「そうか、なら、ここでお別れだな。」

勇次郎は幼女を下ろしてやると、別れを告げる。

「うん……ばいばい……」

勇次郎と離れる事になり、しゅんと寂しそうな顔をして俯く幼女。

「……わたしがおつきくなったら、およめさんにしてくれる……？」

そして、勇次郎を見つめながら、そんな言葉が続けた。

「なっ……ふ、ははははは!!……お前が成長し喰うに値すると判断したら、その時は迎えに来てやる。」

突然の幼女の言葉に一瞬唾然とするも、高らかに笑いそんな約束をして幼女の収容室を後にする勇次郎。

そして、先に進むとそこには奇妙な生物を模したコンクリートの彫刻があった。

2nd Tale 「ダルマさんが転んだと1つ目のスライム」

今現在、SCP財団施設内に侵入した勇次郎の目の前には2mを超える頭でっかちな人型の石像があった。

顔の部分には緑の目にも見えるペイントと、赤と黒のペイントが不気味な顔を模しているようにも見える。

見た者に、言い知れぬ不気味さと恐怖感を与える見た目のこの奇妙な彫刻。

その彫刻の正体は、危険極まりないSCPだった。

アイテム番号：SCP-173、オブジェクトクラス：Euclid、通称は彫刻
—オリジナル。

この彫刻は鉄筋とコンクリートで構成されており、特筆すべき点はこの彫刻は生きていくという事だ。

目視されている際は、一切動く事は無いのだが瞬きなどの一瞬の間でも目を離すと動き出す。

そして動き出したが最後、常人には到底反応出来ないスピードで頸椎を圧断もしくは

絞殺という敵対的な行動に出る。

「ふん、趣味の悪い彫刻だぜ。」

勇次郎は当然そんな情報を知らず、マジマジと見た後そんな感想を漏らし視線を外す。

その瞬間、彫刻は勇次郎の頸椎を破壊しようとして動き出す。

しかし、相手は地上最強の生物である範馬勇次郎なのだ。

長年の戦場生活や戦闘の中では敵に不意打ちされる事など日常茶飯事である。

故に、相手の闘志や殺意を感じるセンサーは野生動物のそれを遥かに凌駕した性能である。

そして、そんな高性能なセンサーが搭載されているのは、地上最強の肉体なのだ。

その結果、彫刻が勇次郎の頸椎に攻撃を仕掛けるよりも先に、その超反応により彫刻を見据えていた。

「貴様、今動いたな……？」

悪魔的なオーラを発しながら、彫刻を見据える勇次郎。

「なるほど……見られている間は動かないみてえだな。抵抗せぬ無機物を破壊した所で、なんの意味も持たん。良いだろう、好きなだけ攻撃してこい。」

勇次郎はそう言うのと、あろう事か目を瞑ってしまふ。

彫刻は再度、瞬時に動き出し勇次郎の首をその鉄筋コンクリート製の両手でもって締め上げる。

常人であれば、窒息どころか頸椎は砕け、果て首は圧断されてしまうだろう。

首は本来頸椎や頸動脈等の急所が集まる場所である。

故に、硬い骨の周りを筋肉が覆い防衛されている場所でもあるのだ。

そんな場所を丸みの帯びた両の手で圧断してしまうこの彫刻は如何程の力を持っているのだろうか。

だが、肝心の相手の首は地上最強の生物の首なのだ。

30m級の象すらも屠り去るこの雄の筋力の頑丈さは如何程のものだろう。

両者がぶつかり合った結果、勇次郎は骨折はおろか窒息すらもしていない。

それは彫刻が力を抜いているという事では決してない。

何故なら締め上げる音が周りに響いているからだ。

それは、人体と鉄筋コンクリートが奏でられる様な音では無かった。

鉄筋コンクリートが金属に擦り付けられる様な、重く低い摩擦音だ。

そして、突如として彫刻はその身を勇次郎から遠ざけた。

鉄筋コンクリートで出来たその両腕は、歪な半円に削れていた。

勇次郎の桁外れの首の頑強さに、彫刻の耐久力が持たなかったのだ。

「どうした？もう、終わりか？」

勇次郎の挑発に、彫刻はその超スピードを持つて攻撃を開始する。

自ら視覚を封じ、さらには鉄筋コンクリートの塊に殴打される勇次郎。

何処から攻撃が飛んでくるか分からない状況、そして彫刻の攻撃の全ては一撃必殺の威力を誇る。

だが、そんな状況の中でも、2発の直撃から先は彫刻の攻撃は空振り始める。

彫刻は勇次郎に一撃を放つては離脱するというヒットアンドアウェイ戦法に出ている。

だが、それも突如終わりを告げる。

それは攻撃を躲していた勇次郎の顔面に、彫刻の一撃がモロに直撃した瞬間に起きた。

目を瞑ったまま彫刻の一撃を顔面で受け止めると同時に、彫刻の首辺りを鷲掴みにしたのだ。

「なかなか美味そうだ。喰うぜ!!」

勇次郎の指先に力が込められていく。

通常の鉄筋コンクリートよりも頑強なのか、彫刻の首はゴリゴリと軋む音を立てて耐えるがやがて碎ける。

首が碎けるも、彫刻はまだ動けるようで勇次郎に襲い掛かるが叩かれ、蹴られ、碎けていく。

足と腕を一本ずつ失った頃、攻撃が止んだ。

勇次郎は攻撃が来ない事に気付き、目を開けると彫刻は土下座の形で固まっていた。

「ふん、中々愉しませて貰った。」

そうとだけ言い残すと、止めは刺さず先へと進む勇次郎。

全力でやり合い、降伏を示した事で見逃した様だ。

その後、彫刻は手足が千切れ、首の一部が碎けるも、数日後には修復していた。

ともあれ、彫刻は地上最強の生物、範馬勇次郎の前に敗れ去ったのだった。

またしばらく歩き続ける勇次郎の前に、奇妙な1つ目の車輪が付いた生物が目の前で壁に激突する。

某RPGに登場するスライムを1つ目にして車輪を付けた様な見た目のその生物は言わずもがなSCPだ。

アイテム番号：SCP-1131、オブジェクトクラス：Safe、通称アイポッド。

SCPにしては珍しく、友好的なアイポッドは勇次郎を見つけると甘える様に擦り寄る。

勇次郎は最初の方こそ、どんな性質かを見極める様に観察していたが、敵意が無いの

が分かり無視して歩く。

だが、勇次郎に着いて周り、擦り寄る姿に多少の可愛らしさを感じたのか撫でてやる。「奇妙な見た目ではあるが、なかなかどうして、可愛いもんじゃねえか。」

そんな事を言えば、しばらくアイポッドと一緒に施設内を探索する。

しばらく、歩き回りながらアイポッドとじやれたりしていると、不意にアイポッドが勇次郎の周りを回リだす。

その姿は、必死になって何かを伝えようとしている様だ。

「なんだ？俺に何を伝えようとしている？」

アイポッドはどうやら勇次郎を制止しようとしているようだが、勇次郎は構わず先に進もうとする。

すると、アイポッドは勇次郎より先に次の部屋へと入ってしまった。

すると、何やら金切り声のような泣き叫ぶ様な声が聞こえ、その直後にアイポッドが全速力で飛び出してくる。

しかし、アイポッドはまたも勇次郎の目の前で壁に激突し、何かに怯えた様に震えている。

すると、何かの叫び声は止まり、次いで超高速の人型の何かが勇次郎の目の前を過ぎ去りアイポッドに襲いかかる。

「良く連れて来た。後は任せな。」

アイポッドに襲いかかる人型の何かの頭を鷲掴みにしてぶん投げる勇次郎。

その人型の何かは、酷く痩せ細り、異様に長い腕をしていて顔を手で覆い隠しながら再度叫ぶ。

3rd Tale 「泣いた恥ずかしがり屋と笑う鬼」

ソレの叫び声は人間の声ではあるが、野獣の様でもあり、猿叫というものが一番近いと言える。

そんな誰しもが、迫力と狂気と殺気が入り交じった叫び声には恐怖をおぼえるだろう。

だがこの男、勇次郎は怯えるどころか、この先の愉しみを見据えてか、笑っていた。そもそも恐怖とは、自身に対する危機感を感じた時に現れる感情なのだ。

地上最強の生物である勇次郎にとって、自分以外は弱者であり、恐怖など感じようが無かった。

叫び声止んだ瞬間、ソレは勇次郎に飛びかかってくる。

ソレの正体はアイテム番号：SCP-096、オブジェクトクラス：Euclid、通称：シャイガイ。

この、シャイガイというSCPは自身の顔を見た者を殺害するという習性を持っている。

戦闘力はEuclidでありながら、killerを含めたSCPの中でもトップクラ

スである。

さらに厄介なのは、映像や写真で、たとえ知覚せずとも、4ピクセル程であろうとも、顔を見た者は必ず殺害する。

ある1例のSCPを除いて生き残った者はおらず、対戦車砲やミニガンの掃射にも怪我1つ負わない。

シャイガイは勇次郎を引き裂こうと、指先を振るう。

それは、人間を紙くずの様に引き裂いて来た必殺の一撃だった。

しかし、勇次郎に当たるも、金属同士がぶつかり合うような音を立てながら勇次郎は無傷だった。

そこへ、勇次郎の反撃の右ストレートがシャイガイの顔面を捉えシャイガイは吹き飛ばす。

だが、シャイガイは壁をぶち破りさらに転がるも、すぐ様立ち上がり襲いかかる。

先程よりもスピードが増したシャイガイの攻撃の全て最小限で躲し、今度はハイキックがシャイガイの顔面を捉える。

再度、シャイガイは吹き飛び、それでも勇次郎へと挑み掛かっていく。

シャイガイのスピードはさらに上がり、果敢に勇次郎攻め立てるが、その都度勇次郎にカウンターを決められる。

シャイガイは引つ掻き以外に、嘯み付きや殴打といった攻撃方法も用いる。

幾度と無く攻めれば、次第にシャイガイの攻撃が勇次郎に当たり始める。

何度も攻防を繰り返していけば、遂に勇次郎に多少の痣を作るに至る。

しかし、シャイガイはその何十倍ものダメージが蓄積し、動きも鈍くなっている。

まったく弱らない勇次郎を前に、シャイガイはかかと落としを喰らい遂にダウンを喫する。

すると、シャイガイは心が折れたのか、自身の顔を手で覆いながら泣き始めた。

「おいおい、どうしたあ？ そんなに顔を見られるのが嫌なのか？」

ニタニタと笑みを浮かべながら、部屋の隅で顔を隠し泣いているシャイガイに近付く勇次郎。

「見るなどと言われると見なくなっちゃう…… 貴様の面、拝ませて貰うぜ。」

そういうと勇次郎はシャイガイの胸を右足で踏みつけ、両手首をしっかりと握る。

そして、シャイガイの腕を力いっぱい引つ張っていく勇次郎。

シャイガイも必死に抵抗するが、為す術なく顔から手をひっぺがされる。

さらに、シャイガイの腕は引つ張られ、どうやら勇次郎は引き千切るつもりらしい。

「なかなか、丈夫じゃねえか。」

そういうと勇次郎はさらに力を込め、血管が浮き出て力こぶは隆起し、踏み締めによ

シャイガイは四六時中、部屋の隅で頭を抱えながら震え、泣いているだけだった。

時間は巻戻り、勇次郎は施設内を更に探索していると、名状し難い変な人型を見かける。

こいつはアイテム番号：SCP-2662、オブジェクトクラス：keter、通称：クトウルフ ふっぎけんな！

約4m程の体躯を持ち、背中に触手が20本も生えた人型生物である。

オブジェクトクラスはketerと危険な存在ではあるが、本体は至つて常識的な感性を持つ。

また本体にはあまり戦闘力は無く、どちらかというとな無意識に起こしてしまう事象が危険なのだ。

そんなクトウルフは收容にもかなり協力的で、收容違反も起こそうとはしない。

では、何故今、クトウルフは收容室から出て恐る恐る周りを伺いながら歩いているのか。

それは、クトウルフの收容室の扉が開いたまま、職員が悲鳴などが響き渡っていたためだ。

最初はじっとしていたが職員の悲鳴が止んでも開いたままなので、様子を見に来たのだ。

そして、クトウルフは廊下の角から覗き込むと勇次郎と目が合ってしまった。

その瞬間、クトウルフは勇次郎の戦闘力を見抜き、刹那にも及ぶ動きを見せる。

膝を折り畳み、手を床につき、頭を更に下に擦り付ける、それはそれは美しい土下座だった。

「お願い致します！ 我は貴方様と争う気は毛頭ありませんので、見逃してください！ お許し下さい！ 殺さないで！」

矢継ぎ早の命乞いに、最初は訪れる愉悦に身構えていた勇次郎だが、さすがに、戦闘態勢を解く。

「おい、テメエ。この奴らに……………」

勇次郎が何か言いかけるのを遮るように、数人の人間が仔牛を連れて現れる。

これらは、クトウルフの特殊能力信者召喚によるもので、クトウルフの意思に関係なく現れる災害の様なものだ。

「くそっ……………！ こんな時に……………」

空気を一切読まない信者に対して、苛立ちを隠す事が出来ない。

「……………」

しかし、信者の様子もおかしく普段ならすぐ様儀式等を執り行うが、微動だにしない。

何故なら勇次郎が信者達を見据えて無言で睨みつけていたためだ。

精神が狂った信者達にもこの場の絶対者が分かるようで、身動き出来ずにいた。

「……………失せろ。」

勇次郎が信者達に短くそう告げると、信者達は一目散に去っていった。

「す、すげー……………」

幾度となく信者達に接近され散々な目に合っていたクトウルフは感嘆していた。

「邪魔が入ったが、続けるぞ。テメエは、ここの奴らに詳しいのか？」

「す、すみません…。我は、収容されている身なので、あまり詳しくはありません……………」

幾つかは知っていますが……………」

勇次郎の再びの問いに、我に返ったクトウルフはそんなふうに見える。

「なら、テメエが思う一番強そうな奴の所へ連れて行け。」

勇次郎が端的にそう伝えれば、クトウルフは案内を始める。

暫く歩くと嚴重そうな扉と、分厚い防弾ガラスの先にある、宙に浮いたコンテナを見つけた。

Side Tale 「始まらない英雄譚」

勇次郎が、財団の施設を半ば見学でもするかのように楽しんでいる頃、東京某所の借家にてそれは起こった。

この家の住人である18歳の少年が、帰宅してそれに気付いた。

この少年一見すると普通の高校生に見える、顔は整っており、某名前が強そうな女性タレントに似ている。

だが、問題はその下に隠された凝縮された人間離れた肉体にある。

大小様々な傷があり、無駄な肉は殆ど存在しない超肉体であり、一瞬にして強いと分らせる肉体である。

この少年こそ、東京ドーム地下闘技場最年少チャンピオンであり、あの範馬勇次郎の実子である、範馬刃牙だ。

そんな、刃牙は自宅の郵便ポストに入れられている謎の黒い本を前に、困惑の表情を浮かべていた。

「なんだこれ……？ 新手の聖書とか……？」

そんな独り言を呟きながら、その黒い本を手にとって見ようと触れる。

その瞬間、刃牙はこの世界から忽然と姿を消してしまった。

そして、黒い本はポストから落ちてタイトルが明らかになる。

『地上最強の生物に殺されかけた息子を命を賭けて救った、愛と勇気を持った母親の英雄譚』

この黒い本こそ、アイテム番号：SCP—268—JP、オブジェクトクラス：Euclid、通称：終わらない英雄譚なのである。

この終わらない英雄譚は、命を犠牲に救われたAとAを救ったBに対して異常を起こすSCPだ。

内容は、Aがこの終わらない英雄譚に触れると、この本の中に閉じ込められ、そこに死んだ筈のBが現れる。

そして、Aの危機的状況に、BがAを助けるかどうかの選択を迫られるのだ。

Aを救うために、Bは命を賭けねばならず、救ったとしてもまた、同じ状況の繰り返しとなる。

そして、Bには死んだ時の苦痛や恐怖を覚えたまま、また、選択を迫られる。

仮に、Aを助けなければ、Aは死体となって、終わらない英雄譚の横に現れ、タイトルがBを侮辱するものになる。

とどのつまりは、A、B共に救われないという胸糞悪いSCPなのである。

刃牙はそんな終わらない英雄譚に取り込まれ、目を覚ますと、縄で拘束され地面に横たわっていた。

だが、刃牙はそんな事よりも、自身の傍らにいる女性に目を奪われていた。

「か、母さん……!?!」

そう、刃牙の傍らにいたのは5年前、勇次郎から刃牙を庇って死んだ彼の母親である朱沢江珠だったのだ。

「ば、刃牙……刃牙なの!?!」

驚く2人を他所に、どこからともなく、声が響き渡ってくる。

『縄で拘束された少年の頭上から鉄骨が大量に落ちてくる。誰かが庇わなければ死んでしまうだろう。』

そんなナレーションとも言える、説明口調で2人は鉄骨がビルから落ちてくるのに気付く。

「刃牙っ!!」

「離れてろツツ!!母さんツツ!!」

我が子を助けようと、近付こうとする江珠に、刃牙はそう怒鳴ると、縛られていない足で立ち上がり、鉄骨を蹴り飛ばす。

57本目の鉄骨を蹴り飛ばした所で、刃牙と江珠の視界は暗転する。

これは、2人がダメージを負ったからでも、死んだからでもない。

英雄譚がこれは、危機的状況になり得ないと判断し新しいシチュエーションを用意したためだ。

次のシチュエーションは、超高層ビルから落ちる寸前の刃牙とそれを助けようとする江珠。

ナレーションの様な声曰く、刃牙を助ければ江珠は落ちるらしい。

だが、刃牙はこう江珠に伝えた。

「大丈夫だよ、母さん。」

そのまま、落ちていく刃牙は、落ちていく途中でビルを蹴ると、車の上に衝突する。

以前にも同様の事があり、その時と結果は変わらず、無事に生還したのだった。

これを受け英雄譚はまた、別のシチュエーションを用意する。

今度は、火災の発生した牢屋に閉じ込められる江珠と刃牙。

耐火スーツは1つしかなく、江珠が犠牲になり、刃牙に着せるとでもいう様なシチュエーションだ。

だが刃牙は念の為、江珠に耐火スーツを着せると、コンクリートの壁をぶち破り、無事に2人で脱出する。

すると、またシチュエーションが変わり、今度は、銃火器を持った数人の男達に囲まれる刃牙と江珠。

刃牙は、江珠を伏せさせると、瞬く間に全員を返り討ちにする。

その後も、ライオンの群れを倒し、虎を倒し、電車には見よう見まねの消力シヤオリにて対処した。

英雄譚が課す、無理難題の尽くを、刃牙はその肉体を武器にねじ伏せていった。

そして、今、現在、刃牙はある男と対峙していた。

「む、無理よ……絶対には勝てるはずがない……」

江珠は、半ば絶望したかのようにフラフラと立ち上がり、刃牙を庇おうとする。

「邪魔しないでくれツツ!!母さんツツ!!」

そんな江珠に、刃牙は声を荒らげてそう伝える。

「久しぶりだなあ……親父イイ……いや、昔の親父か……」

刃牙が対峙しているのは、範馬勇次郎その人だった。

「少し、前から不思議だったんだ……独歩さんやピクルや武蔵さんやオリバさんや

花山さん……みんなに、襲いかかられれば、俺だって敵わないの……」

も、漸くわかった……出てくる危険やシチュエーションは、母さんの記憶や想像以

上の事はできないみてえだな……?」

そう、今対峙しているのは、刃牙が13歳の頃の範馬勇次郎なのだ。

「やめなさいッツ!! 刃牙ッツ!!」

勇次郎に立ち向かおうとする刃牙を泣いて止める江珠。

だが、しかし……………

「大丈夫だよ、母さん。親父の最高潮があこの頃のままなら……………俺は、あんなに苦労しなくて済んだはずだから。親父が本当に凄いのは、膨張し続ける宇宙の如く、成長する所……………つてのは、ストライダムさんの言葉だけだね。」

そういうと、姿勢を低く構える刃牙。

「行くぞッツ!!! 親じい〜!!!」

そういうと、放ったのは、刃牙のオリジナル技の1つ、ゴキブリ 蜚タツクル。

筋肉を気化させる程のイメージ力で超脱力した筋肉は、初速から最高速度を叩き出す。

そのスピード、実に270キロッツ!! 新幹線に匹敵するッツ!!

その速度で勇次郎を吹き飛ばし、更には追撃で、顎の皮のみを掠らせる超絶なテクニクによる打撃。

今の勇次郎ならいざ知らず、愚地独歩との戦いで打撃を避けられなかった頃よりも前の勇次郎では、当然避ける事が出来ず倒れ伏すのみ。

勇次郎を倒すと、不思議な事に刃牙の身体が、霧のように消えていく。

「どうやら、全て終わったみたいだね……………」

「刃牙…………… こんなにも強くなつたのね…………… 私は、母親として、貴方に何もしてこなかつた…………… 許されるとは思ってないけど……………」

江珠が謝ろうとするのを、刃牙は制して、言葉が続ける。

「母さんは、親父から命懸けで、俺を守護まもつてくれました…………… あれだけで俺には十分すぎます…………… 今の俺があるのは、貴方のお陰です。」

刃牙はそう言つて江珠に頭を下げた。

そんな刃牙を抱きしめる江珠は泣きながら、笑つていた。

そして、刃牙の身体は完全に霧散して、英雄譚の中から消えた。

こうして、現実世界に戻つてきた刃牙は日付を確かめるが、あれから1日も経過して
いながつた。

それは、英雄譚の用意したシチュエーションを全て、救助される側の刃牙が乗り切つてしまつたからだろう。

そして、英雄譚の題名も大きく変化していた。

『なろう系も真つ青なクソ厨二野郎がただオナニーの如く活躍した気になつてだけの物語にすらなつていない読む価値がミジンコ程もない糞の塊』

4th Tale 「老人虐待」

宙に浮かんだコンテナには穴が空いており、その下には腐っていて今にも朽ち果てそうな老人がニヤついていた。

その老人の正体は、アイテム番号：SCP-1106、オブジェクトクラス：Ket er、通称オールドマン。

触られただけで腐食性の粘液に触れた個体から溢れ出させ、耐腐食加工のされたものも関係なく腐らせる。

さらには、ポケットダイヤモンドと呼ばれる異空間を作り出し、経由する事で瞬間移動が可能なのだ。

それ故に、危険度がとてつもなく高いKeterクラスに分類されている。

そんなオールドマンが勇次郎へと近付くと、勇次郎も近づいて行く。

だが、触れられる直前でその危険性に気付いたのか、勇次郎は飛び退いてしまう。

それはまるで、大擂台賽の時の郭海皇への反応に似る。

そして、オールドマンの笑みも、言葉はなくとも嘲り笑う様子が見て取れる。

『おやおや、こんな老人に触られるのがそんなに怖いかね?』

少なくとも勇次郎にはそんなふうを感じ取れた。

勇次郎は壁に追い詰められるが、オールドマンのパンチとも呼べぬ接触を避ける。すると、壁がみるみる腐食していくのが分かる。

「このタヌキが、そんなこつたろうと思つたぜ……」

その壁の様子に、勇次郎は凶悪な笑みを浮かべる。

「なるほど、ジジイ…… テメエに触れば、腐るわけだ。だが、触らねば、何も出来ないのも同じ…… ほれ、触つてやるよ。」

あろう事か、勇次郎はそう宣言すると、握手でもするかのようにオールドマンの手に触れた。

だが、流石は勇次郎の超肉体、普通の人体とは段違いである。

なにせ、すぐには腐食が始まらなかったのである。

これには2つの大きな理由が存在している。

1つは、勇次郎の皮膚組織の驚くべき頑強さにより、腐食しにくくなっていること。

2つ目は、勇次郎の体内の白血球等の免疫細胞が、赤子にしてイチゴヤドクガエルの毒に打ち勝つ程強力な事。

だが、それはあくまでも遅延であり、腐食は確実に勇次郎の身体を蝕んでいく。

「…………… 血を流すなどいつ以来か…………… だが、テメエの腐食のクラクリは読め

たぜー！」

そういうと、勇次郎は腕を目に見えぬほどの、マツハのスピードで振る。

すると、オールドマンの粘液は摩擦熱と風圧により、蒸発させられた。

「デメエの体液は、くつついたもんを糧に増殖と腐食を繰り返していく。なら、その前に吹き飛ばしちまえばいいだけの事。カラクリさえ分かれば、簡単なもんだつたぜ、ジジイ。」

勇次郎の言葉に、下卑た笑みはなりを潜めるオールドマン。

どころか、対峙していた勇次郎に背を向けて逃げ出した。

「この……クソジジイッツ!!!」

勇次郎はそんなオールドマンに、髪の毛を逆立てブチギレる。

その怒りの理由は、敵前逃亡に寄るところも大きいが、友人とも呼べなくもない郭海皇とオールドマンを重ねてしまった羞恥心もあった。

勇次郎はオールドマンの正面に周り込めば、思いつきハイキックをぶちかます。

ボロ雑巾のように吹き飛ぶオールドマン。

足を1度、振り回して粘液を蒸発させてから、今度は渾身の右ストレート。

オールドマンの顔はぐしゃぐしゃになるが、まだ生きているらしい。

オールドマンは、何とかポケットテイメンションを作り出し中へ逃げ込むが、勇次郎

も追っていく。

ポケットテイメンション内は狭い部屋へと繋がっていた。

ここでまた、オールドマンに笑みが戻る。

「なるほど、狭い部屋ならば、貴様の体液をよける術がないと？笑わせる。小細工は嫌いだが……」

そういうと、1度だけ見た事のある、天才空手家愚地克巳の生み出した技を使う勇次郎。

通称当てない打撃とよばれ、マツハの真空波を相手に当てる技だ。

だが、あまりのスピードに克巳の腕は持たなかった。

しかし、勇次郎の身体はそれに耐え切ってしまう。

当てない打撃を受け、オールドマンはもんどり打っていた。

「安心しな、こいつはもう使わねえ、俺の流儀じゃねえ。」

そういうと、勇次郎は背中に異常発達した打撃筋による鬼の貌を浮かび上がらせる。

そして、超スピードで殴り飛び散る粘液を避けながら、付着したものは蒸発させながら暴力を続ける。

オールドマンの全身が、ミンチになった頃にポケットテイメンションからゆうゆうと出ていった。

その後、財団の調査では、そのミンチは生きているらしいことが分かり収容される。だが、三年経ってもまだミンチ状態のままである。

5th Tale 「赤い大鳥の丸焼き」

勇次郎は、その場を後にするとやけに嚴重な扉の部屋を見つけた。

扉の隙間から見える範囲には、SCPらしき姿はなく、何故封鎖されているのか分からなかった。

「この部屋…… とりあえず、入ってみるか。」

分厚い金庫の様な扉を破壊して中に進む勇次郎。

外からは見えなかった金庫を見つける。

中身を確認するため破壊すると2枚の紙が入っていた。

「文字が書いてあるな…… あかしけ やなげ 緋色の鳥よ くさはみ ねはみ けをのばせ…… !?…… zzz」

勇次郎は中に書いてある文章を何気なく読み上げると、強烈な睡魔に襲われ眠ってしまふ。

この文章こそ、SCPなのであった。

アイテム番号：SCP-444-JP、オブジェクトクラス：Keter、通称：認識の鳥。

このSCPは文章を読み上げる事で、幻覚空間に閉じ込められる。

そこで、巨大な鳥に何度も食われる苦痛を味わう事になるのだ。

その苦痛のあまり、最初は静止している身体が現実世界で暴れ出し苦痛に歪む。

そう、この文章を読み上げてしまえば誰もが普通はそうなる。

だが、読み上げたのは地上最強の雄である範馬勇次郎だ。

外敵というものが、概ね存在しないのである。

故に、勇次郎は大の字になり、悠々とねていた。

勇次郎は幻覚空間で、気がつけば夕焼けよりも赤い空の血よりも赤い原野に放り出されていた。

そこで、とりあえず、周りを散策する勇次郎。

草も木も何もかもが赤いのだ。

そんな中、ふと、何故か空を飛べると確信する。

とりあえず、その確信に従い両手を広げると実際に飛べた。

「なかなかどうして…… 気持ちのいい物じゃねえか。」

流石の勇次郎も空は飛べないので、飛べることに対しては感慨深いものがあつたようだ。

暫くそうして、飛んでいると巨大な緋色の鳥が勇次郎目掛けて飛んでくる。

そう、例の認識の鳥である。

認識の鳥とは、現実世界ではない幻覚世界に生きている巨大な鳥である。

幻覚世界とは即ち、夢などの意識のみの精神世界である。

そして、その幻覚世界で、この巨大な鳥は最強の生物であった。

幻覚世界には、肉体の強さという概念が存在しない。

故に、勇次郎の地上最強の肉体は持ち込めないのだ。

これでは、地上最強の生物と言えども捕食対象となってしまうのか？

「こりゃあ良い。ちようど腹が減ってた所だ。」

答えは否、否なのである。

何故ならば、肉体という概念が存在しない精神世界では心の強さが全てなのだ。

そして、勇次郎は、誰よりも自身が地上最強の生物であると疑っていない。

地震が襲った時、自分のパンチで地震を止めたと信じるエゴイズム。

これこそが、勇次郎のもう1つの強さなのである。

つまり、地上最強の肉体と地上最強の精神があつてこそ地上最強の生物という訳だ。

地上最強の生物VS精神世界最強の生物。

互いに、外敵が存在しないもの同士。

互いを餌として認識し襲いかかっていく。

最初は、認識の鳥が勇次郎にクチバシで攻撃を開始する。

勇次郎の身体ほどもある巨大なクチバシである。

勇次郎、これを真正面から受け止める。

閉じようとするクチバシを、両手足で無理矢理開けば、顎が外れる認識の鳥。

痛みから、甲高い悲鳴の様な咆哮をあげる。

さらに、勇次郎は天高く足をあげると、カカト落として認識の鳥を地面に叩き落とすた。

それにより、認識の鳥は翼を骨折し動けなくなる。

勇次郎は手頃な木をへし折り組み立てる。

そして、認識の鳥の羽を筆り、着火剤代わりにして石を2つぶつけて火を起こした。

後は生きたまま解体し、焼いて食べてしまう。

暫くすると、勇次郎は記憶が飛び気が付いたら、何もかもが赤い原野へ放り出されていた。

先程と同じ様に、空を飛べると確信して空を実際に飛ぶ。

勇次郎の戦闘能力を知った認識の鳥は不意打ちで勇次郎に攻撃する。

しかし、地上最強の精神で構成される肉体に傷を付けることは叶わなかった。

「鳥か…… そうだ、久々にブラッドソーセージを作るか！」

認識の鳥を手早く叩き落とすと、生きたまま腸を引きずり出し、生き血を抜く。川が流れていたもので、腸を洗い生き血で満たして茹でる。

「血の味がして美味い……！」

そして、また、記憶が飛び気が付いたら赤い原野に放り出される。

認識の鳥も、大したものでその後3度挑むが、返り討ちにされ食われてしまう。

その後は、逃げに徹するもその巨体が災いして、勇次郎に捕食されてしまう。

ある時は脳髓を、ある時は肝臓を、ある時は手羽を、ある時は足を。

鳥に捨てる所なしとはよく言ったもので、毎回違う部位を生きたまま食われてしま

う。何度目か分からない頃、勇次郎は飽きたと感じた。

すると、目が覚めて、現実世界で大の字に寝ていることに気がつく。

「あー、記憶が無いが……なんだったんだ？」

その後、認識の鳥のオブジェクトクラスは safe に格下げされた。

文章を読み上げた所で何も起きなくなつたのだ。

認識の鳥は、範馬勇次郎という地上最強の生物を認識した。

そして、その恐怖から、精神世界内に閉じこもる事を決めたのだ。

勇次郎が、部屋を後にすると、今度は石の棺の様な物を見つけた。

なんだろうかと見つめてみると、棺が開き何者かが出てきた。